

## Australian & New Zealand Bone & Mineral Society 学術大会レポート

口腔解剖学分野・生体歯科補綴学分野 羽 下 麻衣子

新潟大学国際会議研究発表支援事業により、第18回 Australian & New Zealand Bone & Mineral Society 学術大会（2008. 8. 27-30、メルボルン）にて発表の機会をいただきましたので、ここにご報告いたします。私の中で、9月の大学院早期修了前の発表を、大学院の集大成にしたいという思いがありました。その思いを含め、大学院での研究内容との関連から参加を希望したのが、オセアニアを中心とした環太平洋地域や、ヨーロッパなどの各国の骨の研究者が集まる今回の学会です。選択は正しく、メルボルンが真冬であるという大誤算を除いては、帰国を拒否したくなるくらいの最高の一人旅となりました。

最高の旅となった理由の1つが、メルボルンの街並みにあります。メルボルンはイギリス文化が色濃く残る街で、公園の美しさは想像を超えたものでした。公園散策を含めた観光は日没に合わせた閉店時間との戦いで、自分でも考えられないほどアクティブに、学会の合間を縫って、こなして

まいりました。特に、テニスのオーストラリアン・オープンのコートで、トップ選手の気分を味わったことが自慢です。

最高と感じたもう1つの理由は、学会からの収穫が多かったことによります。会場は Hilton on the Park という、まさにイギリス風庭園の中に建つホテルの1フロアで、優雅な雰囲気でした。会場でわかるように規模は大きくないのですが、内容が骨代謝のみに限定されているため、私



写真1 ブースが並び、一部ポスターが掲示された会場です（コーヒーやホテルのスコーンが出てくるアフタヌーンティーの時間がありました）

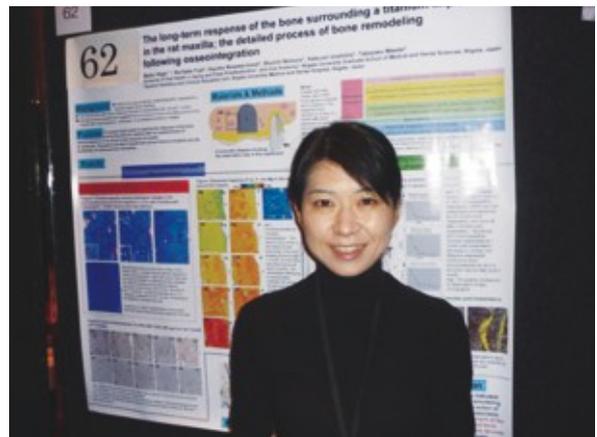


写真2 私のポスターです

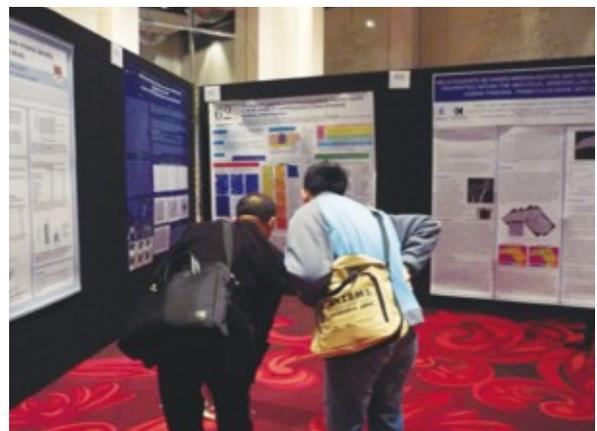


写真3 たまたま私のポスターが見られていたため、関係ない人を装い、写真を撮ってみました

にとって興味のあることが凝縮されていました。一方で、大規模な学会と異なり、日本語が通じないことから、コミュニケーション自体がかなり難しく、英語力不足を痛感しました。ただ、関心のあるセッションに関しては、英語であっても理解可能で、そこから今後の検討課題を見出せたことには驚いております。

私の発表は大学院の2年目以降取り組んだ内容で、ラット上顎骨チタンインプラント植立モデルを長期観察し、免疫組織化学的手法、骨ラベリング法、元素マッピング法などの様々な方法を用いて検索した結果に基づいています。今回は特に、①インプラント周囲骨では恒常的に骨リモデリングが行われていること、②窩洞形成により傷害を受けた既存骨（骨細胞の死により、空虚となった骨小腔を含んでいる骨）や未熟な新生線維性骨が、骨リモデリングによって緻密骨に置換され、成熟化することに焦点をあててまとめました。発表準備の段階で自らの研究を再度見直せたことも、有

意義であったと感じております。実際、学会においては、2日間にわたりポスターを掲示し、各日約2時間のプレゼンテーションを行いました。この際受けた質問により、別視点から実験を捉えられ、臨床の根拠となりうる自分の研究を大切にしていきたいと強く感じるようになったことも収穫でした。歯学部ニュースで連載している「大学院へ行こう」のようですが、今回を含め沢山の貴重な経験をさせていただいたことを考えると、大学院に入ることは予想以上に素晴らしいものであると学生の皆様にもお勧めしたいくらいです。学会発表で受けた刺激を、今後の研究に生かせるよう、努力する決意しております。

最後になりましたが、何かに追われるようにいそぐ私を、いつも温かく導いてくださった前田教授、井上准教授をはじめとする2解剖の皆様と、これまでご支援くださった魚島教授、藤井先生をはじめとする補綴の先生方、またお世話になった多くの方々に感謝申し上げます。

